
犬と囚人

神十夜 雪美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬と囚人

【Nコード】

N1283N

【作者名】

神十夜 雪美

【あらすじ】

強盗殺人犯ビルが出会ったのは、人を信じない凶暴なシベリアンハスキーだった……。今、多くのアメリカの刑務所が、問題のある犬達フリスドッグを教習する制度を取り入れています。これは受刑者達と犬の心の成長を描いた物語です。

犬と囚人（1）（前書き）

はじめまして。神十夜 雪美です。

この度は趣味で書いていた小説を小説家になろうつを
使わせてもらって、発表していきたいと考え
この作品を投稿しました。

良いか、悪いか、面白いか等、

ご感想があればコメントして頂きたいです。

これから、どうぞ宜しくお願い致します。

犬と囚人（1）

1 .
アメリカ合衆国の刑務所では重罪犯罪者に問題を抱えた犬の教習をさせるシステムがある。

犯罪者達の再犯が少ないことから取り入れられたようだ。

犬のほとんどが飼い主によって捨てられていて、凶暴であったり、人間不信な犬ばかりが集まってくる。

中でも、最近連れて来られたばかりのシベリアンハスキーの雌は教習所の人々を悩ませていた。

何でも、野良生活が長かつたらしく捕まえた時は興奮し、暴れて、危うく誰かの腕を食いちぎる所だった。

落ち着かせる為に犬は薬を打たれ、数日前から檻の中に放り込まれたつきり、誰も近付こうとしなかった。

当初は餌を与えようと試みたが、白い歯をむき出しにして威嚇するので、結局誰もが犬の面倒を見るのを諦めてしまっていた。

強盗殺人犯ビルが犬小屋を訪れたのは、シベリアンハスキーが監獄に連れて来られて4日目のことだった。その週、ビルは犬小屋の掃除を他二人と任されていた。3人共、凶暴な犬の噂は耳にしていたが、まだ目にしたことはなかった。檻の隅で蹲る雌犬を観察しながらビル達は口々に言った。

「なんか元気ないみただけど。」

「もう何日も前から飲まず食わずらしい。」

「このままじゃ、死ぬんじゃないか。」

すると、ビルはドックフードを捜しに犬小屋を出た。餌を一掴みして戻って来た彼に対して、男達は心配そうな顔をした。既に大の男を病院送りしている犬と関わるうとするのが信じられないようだった。

遠くで突っ立っている二人を背にして、ビルは試しに少し離れた所からドックフードを投げてみた。

球状の餌は一度コンクリートをバウンドして、犬の鼻先まで転がった。

食べようとする気配はない。続いて二度目も犬の近くで動きを止めたが、興味がないようだった。

何も反応しない犬に気を緩めて、ビルが檻に一步近付くと、今まで無反応だった犬の表情が一変した。素早く起き上がり、今にも飛び掛りそうな体制で唸り声をあげた。

ビルに対してというよりも、あらゆる人間に対しての憎しみが溢れていた。

威嚇する犬にこれ以上、ドックフードを投げつけるわけにはいかず、ビルは腕を下ろした。

良く見れば、綺麗な顔をした犬だった。透き通ったスカイブルーの目が特徴的だ。

ビルはゆっくりとした動作でしゃがみ込むと右手を恐る恐る檻の方へ伸ばしてみた。

「おいっ！怪我するぞ。」

ビルの恐るべき行動に男達は慌てる。

犬は威嚇はしているものの、襲い掛かって来る気配はない。ビルの右手が檻の柵を越えて餌居れまで辿り着いた。そっと手を離すと、ドックフードが金属の入れ物の中で転がった。その音に犬が低く唸る。

ビルは犬から目を離さずに、「水。」と呟き、空いた右手を男達に差し出した。

ぽーっと眺めていた彼らは慌ててホースを引っ張って来ると、ビルに手渡し、蛇口を緩めた。

水がちよろちよろと流れ出し、コンクリートの廊下に流れ始める。

ビルは先程と同じように、ゆっくりとホースを柵に入れた。

途端、犬が移動した。犬は勢い余って、柵にぶつかり、ビルは驚い

てホースから手を離した。

幸い柵があつたので、犬はビルを噛み殺すことは出来なかつた。

ホースはビルが手を離れた時に床に転がってしまった。水がゆつくりと、乾いたコンクリートに染み渡る。ビルはというと目の前で吠え立てる犬を落ち着いた様子で眺めていた。

動かないビルに興味を無くしたのか、喉が枯れたのか、犬はしばらくすると黙り込んだ。

「お前も、こんな所嫌だよなあ。何にもしてないのに、閉じ込められて。」

ビルがそう呟くと、「全くだ。」と言うように犬が唸った。

ビルはまたゆつくりとした動作で、ホースを掴むと立ち上がって檻から離れた。

犬と囚人（2）

2・

自分のやった事に対して、ビルは後悔はしていた。

金欲しさに街角の小さなスーパーマーケットに押し入り、拳銃で店員を脅し、後ろから取り押さえようとした客の頭を弾丸で貫いた。殺すつもりなんてなかった。ただ、驚いて振り返り、焦って引き金を引いた先が運悪く男の額だったただけだ。興奮していたし、ビル自身も何をやっているのか良くわからなかった。

血を流して、床に崩れ去る男を見下ろして頭が真っ白になった。金を奪って逃げるだけの筈だったのに想定範囲外のこと起きた。取り返しのつかないことをしてしまった、と思った。

ビルは強盗はやってもし殺人に手を染めるような狂った男ではなかった。物事は計画的にやるタイプだし、普段から軽はずみな行動はしなかった。ある日、金に困り、一体何を思ったのか父親が遺した拳銃を持って、近所のスーパーに飛び込んだ。考えて見れば最初から上手く行くはずなんてなかったのだ。覆面を被っているわけでも、計画を立てた犯行でもなく、金が少量でも手に入ればラッキーと軽い感覚で店に入った。

客は夜中ということもあって、少なかった。アジア系の店員一人とレジで会計をしていた中年のスーツを着た男、雑誌を読んでいた青いジャンパーを羽織った若い男のみ。

ビルが銃を構えると近くで雑誌を読んでいた男は腰を抜かし、レジに立つ店員は素早く状況を察知して手を上げた。中年の男も一歩後ろに下がりがつつ、無抵抗の意を表した。

ビルはこみ上げてくる興奮を抑えながら、息荒く用意した袋を店員に投げつけると金を要求した。映画で見る限り、強盗犯はもたもたしてはいけないと把握していたので、素早く要件を伝えた。通報されてもいない内から、パトカーを気にしてガラス越しに外を見た。

まだ、大勢の警官が銃を構えて入ってくる様子はない。若者は未だに腰が抜けたままだし、中年の男も壁にびったりと張り付いて手を上げている。

まだ学生らしき店員はかなり怯えているようで、震えて言う事を聞かない手で一生懸命に金を袋に入れ始めた。2分程経った頃だろうか、ビルはもたつく店員に嫌気がさしていた。苛立ちと焦りが募り、つい舌打ちをした。そして文句の言葉を言おうと口を開いた。瞬間、びくびくとしていた店員の表情が一変したのだ。明らかに自分か、後ろに居る何かに驚いていた。

背後に気配を感じ取り、押さえつけようとした中年の男を突き飛ばした。静かにしていたはずの男がいつの間にか移動していて、気が緩み始めた自分から銃を取ろうと試みたようだ。ビルはいきなりのハプニングに慌てて、汗でべとべとになっていた銃の引き金を引いてしまった。もちろん当てるつもりなんか、さらさらなかった。その弾がまさか見事、男の額に命中するとも思っていなかった。

男の後ろで破裂するように血が噴出し、その場で倒れ、息を引き取ったことに気が付くまで数秒時間がかかった。店員は発砲と同時に床に縮こまり、離れた所に居た若い男が悲鳴を上げた。

それで、我に返った。ビルは拳銃を捨てて、金をそっこのけにして逃げた。捕まるのが怖かったからではない。現実から逃げたかった。自分が犯した罪を認めなくなかったのだ。

心臓が破裂するんじゃないか、という位に走った。走って、走って、限界まで走って、ビルは倒れ込んだ。湿ったアスファルトの上で大の字になって、薄暗い電灯で照らされる路地裏で深呼吸を繰り返した。

この手で、人を射殺したのだ。自分の両手を宙にかかげながら、ビルは信じられない気持ちだった。

もしあの強盗に成功して、万が一捕まったとしても罪はまだ軽かった。今は、強盗で金を奪うどころか殺人犯だ。数時間前までは家でテレビを観ていた自分が嘘のようだった。

洗面所に立った時にたまたま目に付いた父親の形見。狭いアパートを見回して、一生貧乏のままだった父を思い返した。まさか、自分の軽率な思い付きや行動からその後の人生を大きく変えてしまうとは想像していなかった。

どれくらい、横たわっていたか覚えていない。気が付けば、足は警察署に向いていた。

ビルは強盗殺人の罪でその場で即効逮捕され、裁判員から懲役15年を言い渡された。ビルが22歳の冬だった。

犬と囚人（3）

3 .

ビルの与えた少量のドックフードと水は夜中の内に消費されたようだった。空っぽになった餌入れを翌朝見つけて、ビルは嬉しくなった。いくら猛獣とは言え、腹は空くのだ。

昨日出会ったばかりの凶暴で手の付けようがないシベリアンハスキーにビルは親しみを感じていた。人間を強く憎み、頑なに信じようとはしない犬は社会から背を向けられた自分の境遇と重なって見えただのかもしれない。

ビルを見つけると、昨日同様に犬は唸り声を上げたが、その場を動かなかつた。ビルはポケットに手をつ込むと、布に包まれたソーセージを取り出した。

前のような真似はしないで、離れた位置からソーセージを放り投げる。犬は想像通り、興味を示さなかつた。ビルに警戒している為、食べ物に近付こうとしない。前に世話したセントバーナードはそんな事はなかつた。与えた餌は必ず食べるし、撫でれば気持ち良さそうに目を細め、ボールを投げればちゃんと自分のところに帰って来た。愛想が良く、人好きだつた。目の前のシベリアンハスキーは家庭で可愛がられるペットの犬よりも、野生の狼に近い。

しばらくの間、辛抱強く待って見たが、動きそうにもないので諦めてその場を後にした。

ビルが犬の教習に参加するようになったのは、3ヶ月前に部屋が一緒だつた男が刑疫を終え、刑務所を出て行った為だつた。犬好きだつた彼に自分の世話していた犬の面倒を頼まれたのだ。

前任者がよくしつけていたおかげか、ビルがすることはブラッシングと散歩くらいしかなかつた。

その犬も又、1週間前ボランティア団体に引き取られた。囚人はデ

カイが、ビルに懐いてくれていた。

頼まれていた仕事が終わっても、ビルは何となく犬達の世話を続けていた。元々動物は嫌いではなかったし、人間社会から弾き出された自分を受け入れてくれるのは彼ら動物くらいだと思った。

そもそも犬の教習とは、まず人間に慣れさせ、しつけることを意味する。盲導犬や、警察犬を訓練するわけではないので一般家庭に適用出来る犬に成長してくれば、訓練は卒業となる。後は里親探しをしてくれるボランティア団体が犬を引き取るのだ。

新しく外から犬が入って来ると、犬を世話する囚人の一人に世話役が任せられる。

大体は一人一匹だけれど、ベテランになってくると二匹、三匹の世話をいっぺんに任せられるようだ。

受刑者達は命を預かることによって、その重みと責任を学ぶというわけだ。

監獄に連れて来られる犬達は、病気でもないし、老犬でもない。どんな犬にもチャンスと可能性がある。そのことを犬の教習をする彼ら受刑者達にも学んで欲しいと、刑務所の所長は教習説明会の際に言っていた。自分の犬に自分で名前を付けて、パートナーとして共に成長し、また一からやり直す。自らの罪を償い、新しくなった自分として社会に出て行って欲しいと言う所長の願いだっただが、ビルはときたま不安を感じる。殺すつもりはなかったとはいえ、たった3秒で奪い去ってしまった勇氣ある男の命の代償が懲役15年と犬のボランティアなんかで払えるものなのだろうか。

たった数分間、顔を合わせたスーツ姿の中年男。彼にもきつと家族が居たに違いない。愛する妻と、子供達。実家には歳を取った母も居たかもしれない。仕事では結構、重要な役割を果していて、部下からの信頼も厚かっただろう。あの時、たまたまあの店に居たばかりに、少し正義感が強すぎたばかりに、馬鹿な男によってその一生を終えた。

後悔しても済んだことに修正は効かない。でも、ビルは男が生きた

であろう、架空の人生を考えずにはいらなかった。
そうやって、後悔し続けてすでに14年が経過していた。出所まで
後一年。ビルは22から、もう36歳になっていた。

犬と囚人（4）

4 .

体を動かすのが好きなビルは野球が出来る日曜を毎週楽しみにしていた。昨日まで気になっていた、凶暴なシベリアンハスキーや檻に投げ入れたソーセージのことも野球に浮かれてすっかり忘れていた。ビルとよく行動を共にするチャーリーは野球とジョークが上手かった。彼もまた、犬の研修に参加している。彼の巨体に似合わず、臆病なトイ・プードルがパートナーと言うから、彼らが一緒に散歩している姿はとても奇妙だ。チャーリーはビル同様に筋肉質だが、頭一つ分は大きいので、よく他の受刑者から目を付けられた。売られた喧嘩は必ず買うが、自分から他人を傷つけたりはしないのが彼のモットーらしい。

休憩のため、ベンチで水分補給をしていると遠くからジャージ姿のチャーリーがやって来た。

「良い知らせだ、ビル。」

少し息を切らしたチャーリーはビルの横に腰掛けると、意味もなく背中を叩いてきた。チャーリーがこういったスキンシップを取る時には大抵の場合、照れていることが多い。叩かれた反動で水がこぼれたペットボトルの蓋を閉めて、ビルは嬉しそうなチャーリーを見た。すると、彼はビルの両肩を持って激しく前後に振った。

「俺のMaxがついに卒業だよ。」

Maxと言うのは彼の世話するトイ・プードルだ。ペアを組んだ当初は動く全てのものを怖がり、よくお漏らしをした茶色のトイ・プードル。チャーリーのおかげで、少しは改善されたものの、知らない人に会うと未だ後ろ足がふるふる震える。今まで大型犬ばかり相手にして来たチャーリーには怖がりで世話がかかるトイ・プードルには特別愛着があったのかもしれない。チャーリーはMaxのことを恥ずかしがり屋の息子のように大事に育てていた。出所して、自

分に息子が出来たらマックスと名付けるのだと嬉しそうに語っていたチャーリー。

愛しの息子がついに、刑務所から出て新しい世界へ飛び立とうとしているのだから、顔がほころぶのも無理ない。

「そいつは良かったな。新しい飼い主にはおむつも付けとけよ。」
ビルが小便癖が直らないトイ・プードルをからかうと、チャーリーは笑った。

感情をあまり表に出さないビルと違って、チャーリーは感動屋さんだった。感動的な映画や小説でも簡単に涙を流す。

夢とか、希望とか真実の愛とか、ビルにとってまったく無関心のもの、チャーリーは信じていたからだ。

「明日、ボランティア団体があいつを迎えに来るらしい。」

嬉しそうだったチャーリーの言葉に少し寂しさが含まれているのを感じ取ったビルはさっきのお返しとして彼の背中を力の限り叩いた。

「試合が終わったら、Maxに会いに行こうぜ。」
不意打ちをくらって、前のめりになっていたチャーリーはビルの言葉に白い歯を見せて頷いた。

犬小屋は小型、中型、大型と分かれていて、新しく来た犬は病気や周りとの相性の問題を踏まえて大きさを問わず、一緒に同じ小屋を使っていた。

また、凶暴で危険とみなされた犬は他の犬に危害を与えぬよう嚴重に確保されていて、世話するパートナーが1週間以内に見つかからない限り、保健所に連れて行かれ始末されるようだった。今までに何匹もの犬が残念にもそうして、命を奪われて来たらしい。

野球が終了するとMaxが寝起きする小型犬専用の小屋の鍵を借りた。ワクチン済みの、もうすぐ卒業する犬はペットシヨップのような小綺麗な所に入れられている。家庭の環境に対応出来るようにと、フローリングのプレイルームにMaxは居た。

チャーリーとビルはその中でMaxに別れの言葉を告げた。人間の

言葉を理解している様子はなく、いつものように遊んでくれないチャリーをトイ・プードルは不思議がっていた。犬用のゴム製のボールを口に加えたMaxはその場でくるくると回転し、尾っぽを振りながらチャリーを見つめている。ビルはチャリーと愛犬との最後の時間を邪魔しないようにそっと小屋を出た。

「明日か。」

無意識にビルは呟いていた。

後ろを振り返ると綺麗な夕日が横一列に並ぶ犬小屋をオレンジ色に染めていた。

犬と囚人（5）

5 .

トイ・プードルのMaxは無事ボランティア団体に引き取られた。ビルとチャーリーはその時に居合わせなかったが、プリズンドッグの教習員が彼らにそう伝えてくれた。そして、諦め半分といった感じに声のトーンを低くして尋ねた。

「この前連れて来られた、シベリアンハスキーのことだけど・・・君らはペアを組むつもりはない？」

あの凶暴な雌犬に誰も近付きたがらないのは教習員だって承知済みだった。あんな鋭い牙で噛まれたら最後、病院送りだ。腕から大量の血を流して、救急車で運ばれた男は今どうなっているのだろう。

あの時負った深い傷で、すでに退院出来たのだろうか。その一騒動を見ていた受刑者達が多かったせいもあって、シベリアンハスキーとだけは誰もペアを組みたがらなかった。

二人が頭を垂れて沈黙しているのを見た教習員は予想通りの回答に溜め息をついた。

「そうか、また保健所か。」

犬が保健所に行くということは、被告人が死刑を宣告されるのと同じことだ。

あの、透き通ったスカイブルーの目が脳裏に蘇った。人間嫌いの犬、人を憎み、頑なに信じようとしない犬は人間が築く社会に適応出来ないがばかりに、殺されてしまうのだ。

それがごく当たり前の世の中。飼い主が飼育放棄をし、保健所に連れて行かれ、殺戮される犬は年間に何十万匹という。何てことはない、その中の一匹にあの凶暴な雌犬が加えられるだけだ。

連れて行かれた犬達はその日、遅くとも1週間足らずで処分される。ヒトラーがユダヤ人迫害に使ったガス室のように、大量の犬を狭い部屋に押し込み、二酸化炭素で殺すのだそうだ。見たこともないの

に、犬達が苦しそうに喘ぐ姿が思い浮かんだ。
しかし、ビルは何も言えなかった。凶暴な犬に噛み殺されるのが怖かったのではない。他に理由があった。
教習員はそのまま、何も言わずにその場を立ち去った。
これから、保健所にでも電話をするのだろう。後姿に落胆の色が見えた。

強盗殺人犯として逮捕されたビルは22にして天涯孤独の身だった。祖父母を速くに亡くし、唯一の肉親、父でさえも拳銃を持って店に押し入る3ヶ月前に亡くなった。

社会から弾き出され、射殺してしまった被害者の親戚からは無論憎まれた。彼らから湧き出る憎しみを罵倒を、ビルは全身で受け止めた。何度謝っても、涙を流して許しをこうても帰って来ない命。ビルはシベリアンハスキーから自分に向けられる強い憎しみを拭い去れる自信が無かった。

自分にそんな重荷は出来ない、そう思って諦めるしかなかったのだ。ビルとチャーリーは重い気持ちで、続きの作業に取り掛かった。Maxが元気良く、新しい一歩を踏み出したのに保健所に連れて行かれる犬のことばかり考えてしまう。

仕事がかどるはずもなかった。ようやく終えた仕事だったが、その日はチャーリーの方が犬小屋の掃除を任されていた。ビルは自由時間だったが、何となく雌犬のことが気になりチャーリーの後を着いて行った。

すると、犬小屋の前に一台の白い車が止められているのが目に入った。立ち止まって観察すると、その車はどうやら保健所の車らしい。思ったよりも、迎えが早く来たようだった。

ウィンカーを着けばなしで、運転席に人影はない。
チャーリーが他の男達と小屋の中に入っけいき、ビルはドアの前でぼーっと無人の車を眺めていた。

いきなり、車が止まっている犬小屋の中から叫び声が聞こえてきた。

状況を確認するよりも速く、体が動いた。

小屋の一番奥には狭い廊下で尻餅をついた、小太りの男が銃を構えていた。シベリアンハスキーが飛びかかろうとジャンプする瞬間と指をかけた引き金がゆっくりと引かれる瞬間がスローモーションで映し出された。

銃声と、悲痛を訴える鳴き声が同時に聞こえてきた。

すでに走り出していたビルは男を突き飛ばして、開いていた檻の中へ駆け込んだ。

そして床に血を流して、倒れるシベリアンハスキーを男から守るように立ちはだかった。

保健所に連れて行くのには承諾したのに、目の前で殺されそうになった雌犬を庇うなんて、馬鹿な話だった。

「殺さないで下さい。」

ビルは両手を広げ、真剣な眼差しで懇願した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283n/>

犬と囚人

2010年10月9日06時28分発行